**日本における海外留学プログラムの現状**

文献資料に基づく調査

【この1行をあける】

Current Situation regarding Overseas Program in Japan

Based on Literature Review

【この1行をあける】

池袋　太郎\*、新座　三郎\*、天王寺　次郎\*\*

Taro Ikebukuro, Saburo Niiza and Jiro Tennouji

【この1行をあける】

キーワード：海外留学、語学修得、単位互換、インターンシップ

Keywords: Overseas program, Language acquisition, Credit transfer, Internship

──────────────────────────────────────────────────

【この1行をあける】

1. はじめに

(1) 研究の背景

大学における特有の授業形態として，いわゆる「マスプロ講義」がある．マスプロとは大量生産(mass production)に由来しており，大人数の学生を1つの教室に収容して実施する講義形態として説明できる．このタイプの講義は，学生数の多い大学の講義科目全般，必修科目においてしばしば行われている．確かに，マスプロ講義は，業務効率面はもちろんのこと，同じ内容を一度に多くの学生に伝達できるというメリットがある．

一方で，マスプロ講義は一方通行になりがちであり，学生の受講態度が受け身になってしまうとの批判はもちろんある．教員の立場からすると，マスプロ講義を実施するにあたっては1人で多数の学生に対応することになり，講義内容や教材作成に工夫が求められるほか，授業当日の運営や出席管理から成績管理に至るまで負担が大きく，困難な点も多い．

(2) 研究の目的

そこで，今回のワークショップでは，参加者間での事例共有と意見交換を行いながら，マスプロ講義の実施上の問題点の整理と改善のための方法論の共有を行うことを目指した．

【章の区切りでは1行あける】

2. マスプロ授業の実際

ワークショップ開始にあたって，全参加者から現状の取り組みと課題について発言があった．参加者の担当している講義の履修人数は，50名程度から300名程度まで多岐にわたっていた．主な発言の内容をテーマ別に要約する．

第１に，配付資料についてである．とくに，講義で使用するパワーポイントのスライドをそのまま配布することへの疑問を呈した発言が複数あった．例えば，「スライドをそのまま印刷したものを配布することに意味があるのか」「スライドを配布しても学生が活用しないし消化不良なのでレジュメ1枚にしている」といったものである．

第2に，AV機器の操作やパワーポイントの作成や操作の技術に関するものである．参加者からは「パワーポイント以外のAV教材がわからない」「機械音痴なのでAV機器の操作がわからず，授業評価で操作の知識を持ってほしいと指摘された」「アナログ人間でパワーポイントを使用していない」といった指摘があった．一方，「AVを活用したいが勉強をする方法はないか」といった発言もあった．

第3に，AV教材の活用と関連して，著作権の取り扱いについての発言があった．複数の参加者から，個人的に録画したテレビ番組を授業の教材として使用しているとの報告があった．一方で，テレビ番組の録画等を授業で使用する際の著作権の取り扱いについて正確な知識を得たい，という発言があった．著作物の教材利用に関する著作権の取り扱いについての正確な知識については，教員が十分に認識しているとは言えないようだ．

第4に，成績評価への関心が示された．受講者数が大人数になると，採点と評価が教員にとって大きな負担となる．評価の方法として，マークシート式の試験，レポートなどが考えられるが，マスプロ講義においてはどのように運用するのが妥当であるのについては，教員にとって悩みどころのようである．

第5に，授業準備にどのくらいの時間をかけるのかについてである．「しっかりした準備に力をいれたところ，授業評価がアップした」という発言があった一方，「学内業務のため授業準備の時間を十分にとれず，前夜に徹夜で専門外の授業の準備している状況である」との指摘もあった．自分以外の他の教員は授業準備にどのくらいの時間をかけているのかが気になるようである．

【章の区切りでは1行あける】

3. 結果

(1) 海外渡航回数

　生涯の平均海外渡航回数は5.61回であり(未経験者を含めて算出)，「既婚子どもなし」が8.71回と最も高い値であった．一要因分散分析の結果，FLC別の平均値に有意差がみられた(F(5,826)=4.154，p<.01)．過去5年間(2010年1月以降)の渡航については，「あり」が32.3%，「なし」が78.5%となっている．平均渡航回数(未実施者含む)は1.22回であり，一要因の分散分析の結果，FLCによる有意差があった(F(5,826)= 2.364，p<.05)．FLC別では，「既婚子どもなし」(2.19回)，「既婚子ども独立」(1.41回)で渡航回数が多い．

図1　平均渡航回数(FLC別)

(2) FLCと阻害要因

　観光行動研究では，Crawford and Godbey(1987)によるレジャーや旅行実施の阻害要因を「個人内阻害要因」「対人的阻害要因」「構造的阻害要因」に分類する考え方が定着しており，中村・西村・髙井(2010)では，日本人の海外旅行にこれを適用した分析を行った．今回は，言語・コミュニケーションや現地での滞在中の不安，計画準備の負担である「個人内阻害要因」(14項目)，同行者確保等の困難さを示す「対人的阻害要因」(4項目)，時間や金銭面での不足が該当する「構造的阻害要因」(4項目)を5段階評定で測定した．さらに，3つの阻害要因類型ごとに下位尺度の合計得点の平均値をFLC別に算出したところ，表1の結果となった1)．

表1　阻害要因の知覚(FLC別)

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
|  | 構造的阻害要因 | 対人的阻害要因 | 個人内阻害要因 |
| 全体(N=832) | 13.33 | 12.12 | 45.12 |
| 独身子どもなし(N=223) | 13.90 | 13.05 | 47.68 |
| 既婚子どもなし(N=97) | 12.97 | 11.68 | 43.82 |
| 既婚末子0-6歳(N=100) | 13.83 | 11.53 | 44.11 |
| 既婚末子小中高生(N=142) | 14.23 | 12.35 | 43.07 |
| 既婚末子19歳以上(N=161) | 12.75 | 11.92 | 45.66 |
| 既婚子ども独立(N=109) | 11.72 | 11.17 | 43.80 |

4. 結論

マスプロ講義は何よりも受講者が多い．学生をただ座っているだけの受け身の状態にさせずに，「内容に興味を持ってもらう」「説明に注目してもらう」「ノートを取らせる」「授業時間外に学修させる」ことを実現するために，参加者が苦心している状況が明らかになった．その解決策の1つとして，パワーポイントのスライドやテレビ番組の録画などのAV教材の使用がある．これを駆使して講義をできる教員にとっては，「配付資料」と「スライド」や「AV教材」との棲み分けはもちろん，マスプロ講義むけのスライド作成，学生の興味関心を喚起する構成を検討することが課題となるだろう．一方，活用したくても活用できない教員がいるのも事実である．しかし，教室設備は大学によって異なっており，各大学での研修の実施，サポート体制の構築，または教員個人の自助努力しか解決策はない．

【1行あける】

**謝辞**：本研究はJSPS科研費25501017の助成を受けたものである．

【1行あける】

【注】

1)「とてもあてはまる」(5点)，「あてはまる」(4点)，「どちらでもない」(3点)，「あてはまらない」(2点)，「全くあてはまらない」(1点)として得点換算し，合計得点を算出した．

【1行あける】

【参考文献】

前田勇 1996「日本・韓国間の国際観光交流の推移と展望」, , 前田勇『現代観光学の展開― 観光行動・文化観光・国際観光交流』, 169-182.

Urry, J. 1992 "The Tourist Gaze and the Environment," Theory, *Culture and Society*, 9: 1-26.

エイビーロード・リサーチ・センター：海外旅行調査2015：2014年海外旅行者の選択プロセス・評価と今後の意向， <http://www.ab-road.net/research\_center/release/misc/
pdf/20150707\_01.pdf>　(2015年9月2日閲覧)．